

良心を科学する、良心を育む

—— 脳科学・心理学からのアプローチ ——

人間の心のあり方、あるいは自己と他者の関係に対する問いは、人類史と同じくらい長い歴史を持っています。「良心」についても、哲学や宗教において様々な考察が積み重ねられてきました。良心に対する探求はこれまで主として人文社会系の学問においてなされてきましたが、人間の認識能力や心理形成に関しては、近年、科学からのアプローチも本格的になされています。

本シンポジウムでは、良心をめぐる課題を脳科学の視点から問い直し、さらに発達心理学の視点から「良心を育む」可能性を探求し、良心研究の新たなステージを展望したいと考えています。

● 日時：2015年 10月 24日（土）13:00 – 15:30

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 301

● 講演：貫名 信行（同志社大学 脳科学研究科 教授）

内山 伊知郎（同志社大学 心理学部 教授、

同志社小学校 校長）

司会：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）

コメンテーター：位田 隆一（グローバル・スタディーズ研究科教授）

川満 直樹（商学部 准教授）

良心を世界に一良心を覚醒させる知の連携と知の実践



同志社大学 良心学研究センター

<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

講師 略歴

貫名 信行（ぬきな・のぶゆき）

同志社大学大学院脳科学研究科 認知記憶加齢研究部門・教授

1977年 東京大学医学部医学科卒業

1979年 東京大学医学部神経内科入局、

アルツハイマー病病理、神経原線維変化の生化学的研究を行う。

1985-88年ハーバード大学リサーチフェロー

1988年 東京大学神経内科，助手、講師、助教授

ポリグルタミン病の分子病態研究を開始

1997年より理化学研究所脳科学総合研究センター・グループディレクター

構造神経病理研究チーム・チームリーダー

2012年10月 順天堂大学神経変性疾患病態治療探索講座教授

2015年4月 同志社大学現職

専門は病態脳科学・神経内科。特にポリグルタミン病の病態・治療研究を通して、より広汎な神経変性疾患の治療を目指している。

内山 伊知郎（うちやま・いちろう）

同志社大学心理学部教授

同志社大学にて心理学、その後名古屋大学大学院にて教育心理学を学ぶ。静岡県立大学短期大学部を経て、1994年に同志社大学文学部に専任講師として着任。その後、助教授、教授を経て、現在心理学部教授。

発達心理学を専門とし、認知、感情、行動的な側面から子どもや高齢者の発達の検討を進めている。また、道徳性発達や交通安全に関する社会還元を強く志向した研究も行っている。1988年から1989年にかけて米国カリフォルニア大学バークレー校に在外研究に赴き、現在も乳幼児の発達に関する共同研究を実施している。2013年にバークレー校で開催された国際感情学会（ISRE）ではco-chairを務めた。

現在、日本心理学会、日本応用心理学会、道徳性発達実践学会などで理事を務めている。「道徳性発達研究」「交通科学」などの編集長として研究誌の編集にも携わっている。

【お知らせ】新島襄や同志社をテーマにした下記番組がBS11で放送されます。

「新島襄—その心 21世紀のグローバル社会を創造的に生きる」

監修：沖田行司（同志社大学 社会学部教授、良心学研究センター 研究員）

BS11：10月24日（土）夜8時～10時

良心 — 脳科学的アプローチは可能か？
貫名 信行（同志社大学 脳科学研究科 教授）

- 1) 科学の対象としての「良心」とは？
- 2) 欠落からものを考える：脳疾患研究の方法論
- 3) 脳の病変と症状
- 4) 遺伝子異常と症状
- 5) 脳（の活動）をみる方法：今まで見えなかったものを見えるようにする
- 6) 「良心」の欠落とは？サイコパスを考える
- 7) 「良心」の欠落を起こす脳とは？構造、機能、分子
- 8) 「良心」は取り戻せるか？「治療」は可能か？
- 9) 「良心」の欠落の利点
- 10) 新島襄の「良心」をもう一度考える

良心の発達 — 心理学の視点から

内山 伊知郎（同志社大学 心理学部 教授、同志社小学校 校長）

良心とは

同志社英学校開校当初の学生である大西祝先生は、良心について当時の考え方をまとめています。そして良心の発達とは、ものの本質を見る能力が高まるにつれ、善悪の判断が正しくなり、良心の行動が強く鋭くなることであると述べています。

良心という言葉は、その語源に「共に知る」という意味があります。他者と共に知るというのは、自分だけの視点ではなく、他者の視点を取り入れて、世界を共に感じて共有すること、そしてさらに神と共に世界を共有することです。

道徳性発達

発達心理学では、道徳の根源のひとつとなる規則理解についての研究がなされています。発達心理学を築いたと評されるピアジェは、子どもは他者と同じように行動したいのですが、4－5歳にならないとその場を規定している規則について理解できないと述べています。規則の理解には認知能力が伴う必要であり、幼児期が規則理解の発達に重要な時期であるとされています。規則理解の発達における次のステップは小学校高学年であるといわれています。この時期に規則は皆の了解で変更できることが理解できるようになります。道徳性発達はコールバーグなどによりジレンマ課題を使用した研究が進展しています。

向社会性の発達

向社会性は、他者や社会のためになる行動をしようという気持ちです。その要因のひとつとして「共感性」を挙げることができます。共感性は、他者の気持ちを理解し、その他者と同じ感情状態になることです。誕生時から見られ、児童期にかけて発達します。

また、向社会性の要因として「役割取得能力」を挙げることができます。これは、相手の視点に立って相手の気持ちを推測する能力で、セルマンによって研究が進められました。この能力は道徳性発達と同様にジレンマ課題を使用して測定することが可能です。幼児用の「木登り課題」や青年用の「アルメニア課題」がよく使用されています。

さらに、向社会性の感情的側面として「罪悪感」を挙げることができます。罪悪感是自己の内的な行動基準に照らして、それに反したときに感じるもので、喜怒哀楽のような基本的な感情と異なり、自己と関係する自己意識感情、あるいは社会性が強いことから社会感情と呼ばれます。

これらの要因が相互に関係しながら発達し、社会性が育まれます。

同志社の教育理念に掲げられている「自由主義」は、自らが考え行動する力を育むものです。また、「キリスト教主義」は、周囲の人の気持ちを理解するのみならず、高い精神性を身につけ、ものの本質を正しく見極める基礎的な資質を育みます。

発達心理学では、その発達の基礎となる人の認知や感情のメカニズムを明らかにし、同志社で大切にしている一国の良心を涵養するための発達の基礎について考えていきたいと思っています。